



Title	活版印刷術の展開と新聞成立との関連について
Author(s)	江口, 豊
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 67, 1-22
Issue Date	2014-11-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/58803
Type	bulletin (article)
File Information	01_Eguchi.pdf



[Instructions for use](#)

活版印刷術の展開と新聞成立との関連について

江 口 豊

0 序

ヨーロッパで、厳密にはドイツ語圏で近代的な意味での新聞が最初に発生したが、その前身形態を形作る伏流としていくつかの現象が確認されている。そうしたドイツ語圏における新聞の先駆けあるいは前段階ともいべき諸現象については江口（2014）で紹介した。そうした諸現象を辿るだけでも、いわば新聞というものが出現するための状況的要因が複数あったのだとの思いを強くするものの、最終的に新聞出現の「決定打」ともいべきものがあつたのか、あるとすればそれは何だったのかという問いが我々を捉えて放さない。

現在までの研究¹によれば、最古の印刷新聞であるストラスブールの Relation 紙の刊行が他都市の模倣ではなく独自に発想されたいと考えるのが妥当であろう。また、ヴォルフエンビュッテルで1609年に Aviso という新聞が刊行されたことも、現存するほぼ一年分の現物が証明している。確かに Aviso 紙は、他の場所(表紙にニュルンベルクの都市名が明記されている)で編集されたものを単に印刷に付した形跡が濃厚であると判断されている。その後も新聞の刊行はフランクフルト、ベルリン、ハンブルクなどと各地で続いていく。近代的な意味の新聞がなぜヨーロッパで、しかもドイツ語圏で発生・確立したのか、それは単独起源、すなわち特定の場所一箇所で発生したものが拡散したのか、それとも複数の場所で自然発生的にほぼ同時発生したのか。その背後に単なるビジネス上のアイディアを持った者の登場さえ想定すれば、説明として十分なのだろうか。

小論では、新聞成立の重大要件である活版印刷術の成立とその時間的・空間的展開を辿るとともに、当時のその実務経営上の実態について概観を紹介することを第一の目的とする。言うまでもなくグーテンベルクが発明したもの、あるいは諸技術を統合したものとしての活版印刷術については膨大な量の先行研究がある。ここではもとより新たな知見を書き加えるなどということは出来ないが、印刷術の成立とその伝播を、印刷所という経済組織の成立・運営・伝播

1 Welke (2008), Weber (1992)参照。

という側面に重点を置いて整理し直す試みを目標としている。この点については、すでにフェーブル／マルタン（1985）の重層的な研究がある。ドイツ語圏でも僅かながら一次資料に基づいた個別印刷所の記録を分析した研究が発表されている。そうした実態に基づいて、それが新聞成立にどのような影響を与えたのか、両者の関係にいくばくかの光を与える見解についても考察、紹介してみたい。

1 活版印刷術という技術的背景

1.1. グーテンベルクという人物と活版印刷術という技術

活版印刷術は常にヨハネス・グーテンベルク（生年不詳、1468年没）という名前と結びつけられ、論じられてきた。ドイツのライン川沿いに位置するマインツは15世紀頃の神聖ローマ帝国では、選帝侯の一人として、ドイツ王の選挙権をもつ大司教（帝国の大書記官長も兼務）の本拠地であった。15世紀当時の神聖ローマ帝国の政治状況全般に関して、Füssel（2004, 3）は「皇帝が、とりわけ選帝侯に露呈したように帝国等族と対立し」、「不定期な帝国議会の招集が皇帝の諸侯への非自立性を示していた」と総括している。同時に15世紀はいわば大学設立ラッシュの時代にもなっている。ケルンおよびエアフルト（1389年）、ビュルツブルク（1402年）、ライプツィヒ（1409年）、ルーヴァン（1425年）と続いたことがFüssel（2004, 3）にも記されている。この他に、ドイツ語圏に限ってもロストック（1419年）、グライフスヴァルト（1456年）、バーゼルおよびフライブルク（1460年）、などと続く。グーテンベルク没後のことではあるが、マインツ自体にも1477年に大学が設置されている。マインツは現在20万人の人口を擁する中堅都市であるが、1400年頃の人口は約6000人とされている（Füssel 2004, 4）。マインツでは同業者組合と都市貴族との対立が先鋭化し、グーテンベルク自身も含め都市貴族層は複数回に亘りこの都市を離れる事態に至り（グーテンベルク自身ライン側の対岸にあるエルトヴィレ²に居住した時期があると推測されている）、1456年には最終的に支払い不能（現在の言い方であればデフォルト）に至るほど経済的に衰退した（Füssel 同上）。当時の町の手工業として木材加工・販売、海運（勿論ライン川の利用による）、ワイン生産、畑作、布地織物の他に、鉄、非鉄重金属の生産・加工と金細工が挙げられている（Füssel 同上）点が注目される。

グーテンベルクの生年は不詳ではあるものの、1420年の相続問題に関連する記録から（グーテンベルクをその時点で成人と見なすという前提で）、研究者は1393年から1403年の十年間を生年の可能性の範囲としている（Füssel 2004, 5）。1900年に世紀の切れ目という象徴的な年数も国際的な賛同を誘因し、1400年を生年とすることにして、2000年には生誕600周年を祝している。

2 エルトヴィレ(Eltville)はライン川右岸マインツよりもやや下流にあり、現在では列車を乗り継いで30分ほどの距離にある。

聖ヨハネの日とされる6月24日という日付のおまけも付いた生年の問題は、グーテンベルクの肖像とされる絵画や銅像（すべての後世の想像による）にもならぬ根拠がないこともまさに符合している。もとより600年以上前の市井の人物について、何かしら資料が残っていることの方が希有というべきかもしれない。Ruppel (1939, 18ff.) によれば、役所の公文書や裁判記録など31点に彼の名前が確認されている。しかし、種々の関連文献を比較すると、この人物に関する記述（量的な数字を含め）と解釈にはかなりの相違があることが分かる。

グーテンベルクに関する情報として Füssel (2004) から、以下の諸点を箇条書きのかたちでまとめてみた。

- * 聖ヴィクトル修道院会の一員だった（このことからその修道会が運営していたラテン語学校への就学が推測できる）。グーテンベルクはラテン語に堪能だった。
- * エアフルト大学での在学者記録に Johannes de Alta Villa の名前があり、グーテンベルクと結びつける根拠とする見方がある。
- * ストラスブール郊外滞在中の1434年に、マインツ市に対して310グルデンの遺族年金支払いを求めた。
- * マインツの隣家のハインツ・ライゼは貨幣鑄造組合の一員だった。
- * 「1437年以降、ストラスブール市民アンドレアス・ドリッツェーンに宝石の研磨技術を教授していたが、これは貨幣鑄造・金細工の分野の見習い修行の一種だった」。
- * グーテンベルクは新しい技術やその製品への先行投資者を募ることがあったが、そのひとつとして1439年にアーヘンでの巡礼者用の鏡（土産）を売ろうと企画したことがある。年数を間違っただけに出資者、上記のドリッツェーンの兄弟から訴えられたが、これは鉛と錫の合金でできた鏡だったとされている。
- * ストラスブール時代の文書記録には、Pressen(圧搾、印刷機の意)、Form(形、組版の意) Gezeug (素材の意) などの表現が現れるが、これはストラスブールで既に活版印刷のアイデアを実現させていたか実験していたと解釈できる可能性がある。当時の共同出資者は製紙工房の所有者だった。
- * ストラスブールは鐘の鑄造（大聖堂には9トンもの鐘を設置）で有名だったが、マインツにはそうしたものは無かった。
- * 1448年10月17日にマインツでの存在が文書により確認されているが、これは従兄弟のアルノルト・ゲルトフースから5%の金利で150グルデン借用したためである。
- * 1450年には一枚ものの印刷物や書籍印刷が可能な状況になるほど実験が進んでいた。

ここまで細々した点を Füssel (2004) から書き出したのは、紙に関する知識、金属に関する知識、鑄造に関する知識など多くの要素が活版印刷術に関係し、グーテンベルクに関する記録がそうした要素に符合していることが分かるからである。ただし、インクに関してはランプの煤とニス、卵白とを混ぜ合わせたものとされ、現在マインツにあるグーテンベルク博物館の展

示では、そのインクを犬の皮袋（インクの染み出し具合などが最適とのこと）に染みこませたものを印刷前の活字に擦りつけると説明し、実演している。一つ一つの活字について、硬度の高い金属でできたいわゆる父型から母型を作成し、さらにその母型に鉛83%、錫9%、アンチモン6%、銅及び鉄各1%の合金³を流し込み、印刷に使用する活字を量産する。この方法についての詳述は避けるが、多くのグーテンベルク記述にも触れられているように、わずか数秒で合金が固まるという利点がある。これは42行聖書の印刷に際して10万本を要したとも言われる（Füßel 2004, 12）活字の量を考えると効率的であることが分かる。

さてグーテンベルクの活版印刷術は、種々の関連技術の統合という側面があることも明瞭であるが、なかでも印刷の媒体としての紙（限定的には羊皮紙も含む）が重要であることは後に触れる。グーテンベルクの42行聖書では、180部とされる部数のうち、羊皮紙で40から45部、北イタリアのロンバルディアから持ち込まれた紙で135から140部が印刷されたとされる（Füßel 2004, 15）⁴。印刷としては初めての試み故に、一段の行数を変えながら印刷したことなど、試行錯誤が少なからずあったことも想像に難くない。この複雑な作業の概要については、Hoffmann（1993）がもっとも詳しい。Füßel（2004, 15）もいくつかの数量的データを挙げているが、定量的データにいくつか大きな食い違いがあることを承知しておく必要がある。それらをまとめると以下の点が推測されている。

- * 1452年初め頃に印刷作業が開始され、180部の聖書印刷に2年8ヶ月を要した。（一人で聖書一冊を書き写すのに3年程度かかったことと比較すると驚異的な効率改善である）。
- * 10万本の活字制作に少なくとも半年を要した。
- * 印刷工房には、当初4名、後に6名の植字工（ラテン語の素養が必要）が植字と校正にあたった（活字の使用癖や使用されたインクの電子分光法分析などによる）。
- * 印刷には最終的に6台の印刷機と12人の印刷工の他に、インク付けや紙の張り付けをする補助者が必要だった。その他に、賄い婦が2名いたと考えられる。これは当時の習慣で職人などには食事が提供された。
- * 1282ページの聖書180部を印刷するのに230,760回のプロセスを要した。
- * 年間労働日数は約290日から295日⁵に達し、日曜・祭日も作業させたと推測される。
- * 聖書45部分の羊皮紙を確保するのに羊7,400頭⁶が必要とされた。

グーテンベルク聖書（通称42行聖書とかB42と呼ばれることが多い）の完成時期の根拠としては、(1)パリ国立図書館所蔵本の手書き・製本完了の日付としての1456年8月15日および24日（2巻本だったために日付の相違がある）と、(2)いわゆるピッコロミーニ書簡（1454年10月で

3 この成分構成は発見された古い活字を分析した結果による（Füßel 2004: 10 参照）。

4 Hoffmann（1993, 299）はこの部数の比率を45部対135部としている。

5 Füßel（2004, 15）は、200日という年間労働日数を挙げている。

6 グーテンベルク博物館の口頭説明は6,000頭、Füßel（2004, 15）は3,200頭という数字を挙げている。

完成したもの⁷をフランクフルトで見たという報告)がある。上に挙げた種々の数量的データは、当時の労賃・労働習慣を記述した一次資料と、聖書出版にあたって共同出資者として莫大な金額を支出したヨハネス・フストという人物が起こした裁判記録(ヘルマスペルガー公証証書とされるもの)などが根拠となっている。

1.2. 聖書以外の印刷物

グーテンベルクとの関係で『トルコ人暦』(Türkenkalender)という出版物が印刷されたことは比較的よく知られている。実際には、42行聖書を印刷・販売した他にも、当時のマインツの工房ではいろいろなものが印刷されている。Füßel (2004, 21.) は、一枚物の印刷物、贖宥状(いわゆる免罪符)、簡便なラテン語文法書、暦を挙げている。このうち「教会からの依頼で多数印刷された贖宥状は、印刷工房にとってもまちがなく実入りの良い仕事だった」。Füßel (2004, 同上) は、この繰り返し印刷されたものの枚数として数千から、ときには19万という数字をあげている。ゲッティンゲン大学に所蔵されているものは1455年印刷のものと確認されている。同じ年に印刷されたのが『トルコ人暦』と呼ばれる印刷物で、正式には『キリスト教会のトルコ人についての警告』(Eine Mahnung der Christenheit wider die Türken)というタイトルで、6枚ものの暦(1455年用)⁸の形式をとっている。しかし、内容は、異教徒かつ敵であるトルコ人に復讐せよというプロパガンダである。このプロパガンダ印刷物に関しては、その後教皇の大勅書も印刷されている。これらの事例が示しているのは、グーテンベルク工房(上で紹介したヘルマスペルガー公証証書に記録されている訴訟⁹以降はフストとシェファーが運営)では、教会に関係する印刷物がいくつか印刷されている点である。また、他にも若干の印刷部の断片も確認されている。

それ以外に、中世から手写本の形で伝承され、多用されていたラテン語文法書(4世紀のドナトゥスのもの)が、グーテンベルク工房を含め活版印刷初期に合計約350回も印刷されているが、28ページという薄さも多刷の原因であろう。またカトリコン(Catholicon)と呼ばれる印刷物が1460年に印刷されているが、これも手書き本の時代から流布していたもので、「1286年にドミニコ会修道士のヨハネス・バルプス・デ・ヤヌアにより、ラテン語聖書の理解を促すための補助教材として著された。カトリコンの内容にはラテン語文法と、純然たる語彙説明の枠を越えた百科事典的な情報も提供する辞書が含まれている」(Füßel 2004, 30.)。

特記すべきことは、グーテンベルク工房で42行聖書という大事業の他にも、「パンを稼ぐため

7 「完成されたもの」が製本されたものを必ずしも意味しないことに注意されたい。15、16世紀では書物の購入者が自己負担で製本を依頼するのが普通だった。

8 1455年の12回の新月の日付が示されている。Füßel (2004, 23.) 参照。

9 1455年11月6日付けの記録がゲッティンゲン大学図書館に所蔵されており、以降工房はグーテンベルクの手を離れ、投資家ヨハネス・フストの手に渡ったとされる。

の書籍」等の印刷が行われたことで、「それは学校用の教科書、暦、あるいは贖宥状として確実に計算できる売り上げを達成した」(Füssel 2004, 28.)点である。これは16世紀、17世紀を通じて印刷工房の経営上の問題につながる重要な点であり、本論の4章で再度取り上げる。

1.3. グーテンベルク聖書と印刷術の経済的側面

こうした複雑で困難な労働工程や当時としては貴重な素材の確保などは、その経済的側面からも検討する必要がある。先行研究にもいくつかのまとめがあるが、その考察結果については断定できない点、推測に留まる点も多い。

まず製品としてのグーテンベルク聖書は羊皮紙版と紙版とがあり、その価格も異なる。羊皮紙版は100グルデンと高価で、これを Stöber (2005, 30) は大人一人について「相応しい」食事¹⁰と宿舎を5年間提供できる価値、もしくは都市市民の中程度の家屋一軒分の価値と説明している。Stöber (2005, 30) はこの金額の価値を現代のユーロにも換算しているが、例えば金貨100グルデンを現代の3万ユーロから25万ユーロに相当という具合で、対応する金額の幅がかなり大きい。紙版の方は46グルデンとほぼ半値であるが、Catholicon¹¹ という別のグーテンベルクによる出版物とほぼ同等の価格が推定されていて、牛13頭もしくは写字生(独 Schreiber)¹² の給金4年分に相当とされている。注意が必要なのは、この100グルデンもしくは46グルデンという販売価格には、飾り文字・絵の代金と製本代も含まれている点であり、それを差し引くとグーテンベルク工房自体の推定販売価格として90グルデンもしくは40グルデンという数字が出てくる。表1の収支表は Hoffmann (1993) を一部修正して作成したものである。Hoffmann (1993) や Stöber (2005) はグーテンベルク聖書の経済的評価の試みの一例にすぎない。関連文献を一瞥して浮かび上がる点、かつこれらの研究者たち自身も認めている点は、(1)貨幣価値の現代との比較は厳密には困難であること、(2)支出の細目についても最終的で確実な数字は挙げにくいこと(様々な事項に関する量的算定の立て方に大きく左右されることや参考のできる同時代の一次資料が乏しいことに原因がある)、などの問題である。

2 活版印刷術の伝播

裁判記録からグーテンベルクは、自らのアイディアであった活版印刷術について可能なかぎり秘密にしようと試みたと見られている。作業に雇われた職人たちにも部外秘を誓わせたりし

10 中世に肉体労働をする者には3回の間食(スープとパン、粥とパンなど)も与える例外はあったようだが、基本的に一日に食事は二度とされる。Jaeger (2008, 1113ff.) 参照。

11 Catholicon は聖職者のためのラテン語文法書と辞典が一つになったもので、書物が手書きの時代から存在した。1286年にドミニコ派修道僧の Johannes Balbus によって著された。Füssel (2004, 30) 参照。

12 写字生は本を手書きで書き写すことを仕事にしていた者。

表1 Hoffmann (1993) のグーテンベルク聖書に関する収支 (貨幣単位はすべてグルデン)

収 入					
羊皮紙版単価	90	90×45部で総額4,050グルデン			
紙版単価	40	40×135部で総額5,400グルデン			
売り上げ総額	9,450				
支 出					
費 目	金額	比率	内 容		
人件費	賃 金	232.4	12%	校正係1名、植字工6名(始め4名)、印刷工6名(始め4名)、補助者1名、家政婦3名	
	食 事 代	340	18%	植字工、印刷工、補助者に該当	
資 材	羊 皮 紙	620.4	57%	7,300枚(部数45部として)	
	紙	489.5		89連=44,500枚(部数135部として)	
等	イ ン ク	20	1%		
	家賃・暖房	65	3%	家賃15、暖房50	
	そ の 他	60	3%	石鹼15、蠟燭35、印刷見本10	
利 子	109.6	6%	1800グルデンに対し6%		
支 出 総 額	1932	100%			

たのだが、それは短期間で破られることになる。フェーブル／マルタン(1985 下巻, 5f.)にはヨハン・ノイマイスターという名前の関係者のその後の活動と恵まれない末路が紹介されている。いわば企業秘密とされた活版印刷術は、何よりも時代の要請という追い風にもり、比較的短期間にヨーロッパ中に広まった。グーテンベルク聖書完成の4年後には「フランス国王がいち早くマイנטツにひとを遣わし、新技法について照会させたらしく、また1459年にはメンテリンがストラスプールで聖書を刊行」してしまう¹³。先に紹介したピッコロミーニ書簡でも分かるとおり、伝播と普及の対象は、ドイツという現在の感覚で捉えられる国境で区切られた空間というよりも、聖書自体に使われたラテン語とカトリック教会という文化上の紐帯で結ばれたより広範なヨーロッパ文化圏であったといえよう。

この印刷所の伝播や推移については、フェーブル／マルタン(1985)¹⁴に詳しい。フェーブル／マルタン(1985)は、印刷術の伝播の際に注意すべき事項としていくつか指摘している。

- * ドイツ人印刷職人がかなりの遠隔地でも活動した。その背景には当時の職人に求められた遍歴期間(職人として定着できる町を探し求める時期)という習慣があったと考えられる。
- * 聖職者と教会が印刷術の伝播に大きな役割を果たした。当時としては最新の事業であった印刷所の開設・運営には、いわばパトロンとしての出資者が必要で、イタリア、フランスを含め、そうした出資者がドイツ人を含む初期の印刷職人を招聘していた。裕福な民間人

13 フェーブル／マルタン(1985, 下巻4頁)参照。

14 フェーブル／マルタン(1985, 第6章)参照。

の他に教会関係者が多かった¹⁵。

- * 普及期の後に事業としての印刷業が定着・拡大するが、経営を維持する上で一定規模以上の商業資本と書物の販路が前提となっていく。
- * 大学が当初書籍の市場としての役割を果たした。
- * 印刷された書籍の分野は神学および教会関連、法律、人文主義的古典文学作品が先行した。
- * 16世紀末には、大学、教会、裁判所などの大口の顧客のいる都市では、印刷の供給が飽和したと考えられる。
- * 印刷所が小規模都市にも設置されることで、印刷対象の中心が書物から公文書類に移行した。
- * マインツで開始された印刷業の形態は、上にも触れたようにドイツ国内に限定されず、かなり早い時期にイタリア、フランスなどにもひろまり、それ以外のヨーロッパ諸国にもさらに相当な速度で広まった。

印刷術伝播の先陣を切ったのはもちろんドイツ語圏の諸都市である。グーテンベルクが没して2年の1470年まででも、発祥に地マインツと近傍のエルトヴィレ以外ではすでに7都市に印刷所が存在した。それはドイツ語圏を中心として、1460年以前にメンテリンが活動し始めていて、1460年には早くも49行聖書が印刷されたストラスプール¹⁶、36行聖書刊行の地であり、グーテンベルクの弟子と考えられるプフィスターが活動したバンベルク、1466年以降フストとシェファーの下で印刷術を習得したと考えられるウルリッヒ・ツェルが活動したケルン（その出版点数などから、まもなくマインツを差し置いてドイツ語圏の印刷の中心地となる）、ベルトルト・リュッペルが1468年以降に印刷を始めたバーゼル、ギュンター・ツァイナーがやはり1468年には活動し始めたアウクスブルク、後に出版人として名を馳せるコーベルガーの活動の地ニュルンベルク、スイスのルツェルン近郊にある修道院所在地のペーロミュンスターである¹⁷。その後も印刷所は、シュパイアー、ウルム、リューベック、プレスラウ（現ポーランド領）などをはじめとして各都市に陸続と開設される。

2.1. ドイツ以外への拡散

こうした印刷工房開設の波は、ほとんどドイツ語圏の都市と同時期に先鞭を付けたイタリア、フランス、スペインなどにも及ぶことになる。1480年のデータとしてフェーブル／マルタン（1985 下巻, 25.）は「イタリアの約50の都市、ドイツの約30の都市、スイスの5都市、ボヘミ

15 「とりわけ多かったのは、修道院が印刷工を迎えたり、さらには修道士自らが印刷工となる事例」（フェーブル／マルタン 1985, 下巻 11.）とある通りだが、これについても、初期にはドイツ人修道士が迎え入れられていた事例が紹介されている。

16 グーテンベルク自身がマインツでの聖書印刷以前に何かしらの印刷実験をしたと考えられている。

17 フェーブル／マルタン（1985 下巻, 22f.）。上記以外にもスイスのペーロミュンスターが挙げられている。

アの2都市、フランスの9都市、オランダの8都市、ベルギーの5都市、スペインの8都市、ポーランドの1都市、英国の4都市」とヨーロッパ全体で110都市という数字を示している。その後「発明の半世紀後(1495年頃)で、ヨーロッパ350都市に1,000以上の印刷所があった」Wilke (2008, 16.) というほど印刷術は普及した¹⁸。

そうした印刷術の普及の実態の一端を、イタリアを例に紹介してみよう。イタリアは、人文主義の諸著作の母国でもあり、その思潮の中心地でもあったため、初期の書籍印刷ではドイツを差し置いて圧倒的な量と質を誇っていた。実はイタリアで最初に印刷工房が設けられたのはヴェネツィアであった。Füssel (2004, 40ff.) は、15世紀におけるドイツとイタリアとの文化・学問上の交流増加という背景を踏まえ、アウクスブルクやニュルンベルクの都市貴族の子弟がイタリアの大学で学んだり、職人や建築家が修業に赴くということが珍しくなかったことを指摘している。そして、やはりドイツ人印刷技術者ヨハン・フォン・シュパイアーによるキケロ印刷本の奥付に象徴的な文章 (Füssel 2004, 43.) を見つけ出している。

「かつてドイツ人ならだれでもイタリアから本を一冊持ち帰った。彼らが持ち帰ったものについて、今日ふたたび一人のドイツ人が十分にその埋め合わせをしている。すなわち、その技芸で優る者のないハンス・フォン・シュパイアーである。この男が、いかにしてさらに上手に本を書くのか、つまり銅の文字を使って本をどう書くのかを示している。」

ヨハン・フォン・シュパイアーはヴェネツィア市参事会から1469年5年間の独占的印刷業許可を得たが、彼自身は翌年死去し、兄弟が印刷業を継続した。その印刷物には、キケロなどの古典作家の著作、法律学関係の著述、初のイタリア語聖書(1471年)、ペトラルカの民衆語人文主義作品などが挙げられている (Füssel 同上)。

ローマでは、1500年までに印刷所は総計50箇所確認されており、そのうち半数の25箇所ドイツ人印刷工が働いていた (Füssel 2004, 43.)。早くも1465年には、コンラート・スヴァインハイムとアルノルト・パナルツが、ローマの東70キロほどにあるベネディクト会修道院で印刷を開始した記録がある。印刷されたのは、教父ラクタンティウスやキケロの著作であった。こうした印刷物は修道院にとって収入源となっただけで、彼らはその後ローマに移り、聖職者の著作や教皇の大勅書も印刷したことが判明している。

イタリア以外での伝播で必ず触れられるのがフランス、パリでの印刷工房の設立である。学生数などの点で既に膨張期にあったソルボンヌに、1470年初めて開設された印刷所ではコンスタンツ出身のウルリヒ・ゲーリングら三名が、古典作品、人文主義作品などを印刷した。その

18 イエズス会が活版印刷機を日本に持ち込み、いわゆるキリシタン版と呼ばれる印刷物を制作したのが、日本最古の活版印刷とされる。

後、フランス国内では、1473年リヨン、1475年にアルビ、1476年にトゥールーズと印刷所の開設が続き、出版点数でもイタリアに比肩するほどになる。

イタリア、フランス以外でも、ユトレヒト1473年（オランダ）、ヴァレンシア1474年（スペイン）、ブリュッセル（ベルギー）、ピルゼン（チェコ）、クラカウ（ポーランド）、1476年ウェストミンスター、1477年ロンドン（イギリス）と印刷所が普及していったが、先に紹介したドイツ語圏の諸都市との時間差がそれほどではないことに気付かされる。

当然のことながら、新聞が生まれる前提として印刷所は不可欠であり、印刷所がこのように早期にヨーロッパ中に広まっていたことは確認しておく必要がある。

3 紙の問題

活版印刷術の伝播・拡散にともない、紙への需要が急速に高まった。そもそも紙がヨーロッパに到達した経緯、製紙業が広がった経過などについては、フェーブル／マルタン（1985，上巻 第1章）に詳しい。いくつか重要な点をまとめると、

* 紙の生産に大量の清廉な水が不可欠であり、これが製紙業の立地を決定した。

* ヨーロッパの製紙法は結局ボロ布原料無しに成立しなかった（19世紀のパルプ製造まで）¹⁹

* イスラム圏からスペインを經由して製紙業が中欧で最初に導入されたイタリアの紙が、ヨーロッパ市場を席卷した。ただし、運送コストの問題が大きな障害であり、解決策として試みられたのが、

① イタリア人商人自身が資金と職人を提供し、製粉水車を製紙水車に転換して現地生産すること（アヴィニョン1374年）。

② 地元の有力者が紙職人を招聘し、製紙業を許可すること（1391年にドイツのニュルンベルクで富豪シュトレマー、1466年にフランスの大修道院長ジュフロワが実施）。

☆ フランスの修道院では見返りに一年に四連（2000枚）の紙の提供を求めた。

☆ パリ大学などは製紙業の定着を援助したとされる。

もちろんこうした動きと相俟って、ドイツ国内には製紙水車が続々と設置されていった。時間軸に沿って辿ると、1391年グライスミュール、1420年リュベック、1428年ゲネップ（クレーフエ）、1431年リュネブルク、1460年アウクスブルク、1469年ウルム、1480年～1490年ライプツィヒ、1482年エットリンゲン、1489年ランツフート、1490年プレスラウ、1496年ロイトリンゲンと続いた（フェーブル／マルタン 1985，上巻，98.）。Lindemann（1969，26f.）によれば、1600年までにドイツ語圏の製紙施設は160箇所を増えている。

製紙業がドイツでも定着、増加していったものの、Irsigler（2012b，124f.）は、1420年代のニュ

19 17世紀のイギリスではボロ布目当てに墓荒らしさえ行われたらしい。Irsigler（2012b，125）参照。

ルンベルクの製紙業者の例を紹介し、製品の紙が高価すぎて売れず、包装紙に転換せざるを得なかった上に、1456年には製紙事業を一度停止したように、ドイツでの製紙事業が必ずしも順調ではなかったことも指摘している。また、1434年から1454年にかけてドイツにおける製紙業の創業の波があったものの、グーテンベルクが必要としたであろう大きな版型の紙を生産できるようになったのは1460年から1470年であったと Irsigler（同上）は推測している。フェーブル／マルタン（1985，上巻，98.）も、1516年の段階でノルトリンゲン、アウクスブルク、ニュルンベルクでは相変わらずミラノから紙を調達していた事実を指摘しており、ドイツの紙の自給自足は1500年代半ば以降だったと結論づけている。

グーテンベルクの時代からやや下ることになるが、フェーブル／マルタン（1985，上巻，93.）は、17世紀のフランスの印刷所での紙の消費量を、一日一台の印刷機当たりで平均3連（1,500枚）とし、フランス全土で稼働していた500台から1000台の印刷機を考慮すると、フランスだけで印刷に毎日1000連から3000連、つまり50万枚から150万枚の紙が消費されていたと算出している。これは年間にするると45万連から90万連（2億2500万枚から4億5000万枚）という膨大な量である。ストラスブールでのグーテンベルクの共同出資者が製紙水車の所有者だったことも象徴的であるが、製紙業から出版業に出資するケースも多かった。

4 グーテンベルク以後の書籍印刷事業と印刷工房の実態

4.1. 印刷出版事業の財務状況

グーテンベルク以後のドイツ語圏の出版事業者、しかも17世紀に入ってから個別事例の調査研究などを除けば、16世紀以後の印刷業者の実態について詳しい記述を与えてくれるのはフェーブル／マルタン（1985 上巻，第4章および第5章）であろう。ただし、彼らが扱っている対象は基本的にフランス国内の記録に基づくものが多い。

フェーブル／マルタン（1985 同上）によれば、紙の生産量が飛躍的に増大し、価格も低下していくにも関わらず、15世紀から18世紀にかけて、上質紙の購入価格は印刷費よりも高額なままであった。上に提示したグーテンベルク聖書の収支もその典型的なケースと言えよう。そもそもグーテンベルク聖書の収支ほどではないとしても、初期の書籍は程度の差はあれ高額な贅沢品であり、しかも売れるか否かは予測できない、「運を天に任せるような企て」だった（フェーブルマルタン 1985 上巻，241.）。「一冊の本を出版するにはかなりの資本が必要」（フェーブルマルタン 同上）で、いわば大事業だった。また、活字も更新が不可欠で、かつ「書物は非常にゆっくりとしか売れぬもので」あり、それは投資した資金回収に時間がかかることを意味していた。何せ、交通・輸送事情も比較にならないほど恵まれない時代のヨーロッパ中の顧客に文字通り何部ずつかを販売する必要があったからである。

そうした中で、印刷工房にとっての経済的なプラス点は、印刷工房の開設費用が比較的安価

だったことである。以下の表2は、遺産目録に基づいて、フェーブル／マルタン(1985, 上巻, 232ff.)が例示した各種設備・道具の費用である。印刷機に関してはレンタルさえ可能であった。

これに比べて書物の出版は大変に高額の出資が必要である。フェーブルマルタン(1985, 上巻 235.)は「わずか一点の作品の出版にも、設備のよい印刷工房一つを手に入れるより多額の資金が必要であった」と指摘している。以下のパリの印刷工房が受注した書物の契約額の例(表3)を見れば、1524年の信仰手引き書の場合を除き、非常に高額であり、上で紹介した遺産目録の評価額と比較するとそれは歴然としている²⁰。

表2 16世紀パリの印刷設備類の評価額 (フェーブル／マルタン 1985 上巻 232ff. により作成)²¹

年号と総額	品 目	平均価格
小規模な印刷所の例 (1513年) 61.00Lib/P	印刷機×1台	10.00Lib/P
	組版枠2ヶ	3.00Lib/P
	その他道具類	8.00Lib/P
	活字5セット	40.00Lib/P
中規模な印刷所の例 (1520年) 351.00Lib/P	印刷機(ネジ止め鉄製組み版枠、圧盤、雄ネジと雌ネジ付き)×3台	60.00Lib/P
	ミサ典書書体活字の母型と鋳型2つ	24.00Lib/P
	注釈用ブルジョア活字の母型	12.00Lib/P
	スンマ活字の母型	8.00Lib/P
	スンマ・アンゲリカ活字の母型	7.00Lib/P
	中古活字セット×8組	122.00Lib/P
	挿絵原版+銅製アルファベット 活字ケースとその他の道具	16.00Lib/P 102.00Lib/P
大規模な印刷所の例 (1523年) 681.00Lib/P	印刷機×5台	24.00Lib/P
	組み版枠	22.00Lib/P
	活字×10組(状態良好なもの)	360.00Lib/P
	相当量の父型と母型	200.00Lib/P
	飾り文字、カット用装飾模様、木製と銅製の押し型	75.00Lib/P
1515年時	印刷機のレンタル料(1年間)	2.00Lib/T
1540-1550年	印刷機のレンタル料(1年間)	6.00~8.00Lib/T

表3 16世紀パリの書籍印刷の契約額
(フェーブル／マルタン 1985 上巻, 236. により作成)

年号	出版物の内容と発行部数	契約額
1524年	信仰手引き書×600冊	55.00Lib/T
1524年	ミサ典書×400冊	350.00Lib/T
1523年	聖務日課書×600部	300.00Lib/T
1528年	トゥキディデイス×1225部	612.00Lib/T

20 Schellmann (2013) を見れば、17世紀後半の出版事業者では状況はこれほど極端ではない。

21 貨幣単位として二種類リールが提示されている(1 Lib/P×0,8=1 Lib/T)。

表4 16世紀パリの印刷契約の請負額（フェーブル／マルタン 1985 上巻 236. により作成）

年号	印刷物及び部数と印刷契約の条件	契約規定額
1518年	聖務日課書×1300部 一日当たり一葉印刷することへの報酬	1.00Lib/P ²²
1524年	聖務日課書×650部 一日当たり組み版三分の印刷報酬	3.00Lib/T
1524年	教会会議規約×約750部 一日当たり組み版三分の印刷報酬	1.50Lib/T
1526年	聖務日課書×1200部 一日の印刷代（印刷工2名、植字工2名の給料と食事含む）	3.25Lib/T
1539年	植字工の給料（リヨンの場合）	6.50Sous ²³

このように、書物の出版・印刷がリスクをとまなう大きな投資であった背景の一つが紙の値段であった。上でも触れた通り、グーテンベルクの紙版の42行聖書は北イタリア、ロンバルディア産の紙を使用したことが、紙の透かしなどの研究からも裏付けられている。しかも、紙の値段は現在の感覚では理解できないほど高価であった。フェーブル／マルタン(1985 上巻, 237.)は、16世紀フランスの紙について、一連(500枚)あたりの値段例として14スー・トゥルノワ(1539年)、また平均価格として10～30スー・トゥルノワを挙げている。同時に1543年の契約例から、紙一連当たりの印刷報酬として18スー・トゥルノワという数字を見つけているが、これだけで見れば、印刷代金と紙代金とは変わらないということになる。

先のグーテンベルクの42行聖書の場合、羊皮紙も併用している特殊事情があるが、紙代が支出に占める割合は57%（労働者への賃金や原材料費雑費の合計でも37%程度）という高い比率になっている。これを仮にすべてロンバルディア産の紙で180部印刷したと仮定すれば、紙代として約650グルデンという計算が成り立ち、比率は44%という数字に落ち着くが、相変わらず紙代の比率は高い。それほどではないものの、紙代の比重は18世紀まで高いままだった。一方の印刷工房が受け取る契約額は、表4の例によれば、一葉つまり2ページ分で1リーブル、聖務日課書のページ数を140から150ページと仮定すれば総額で70から75リーブル程度となる。参考までに1523年の聖務日課書の総契約額が300リーブルであり、印刷工房の収入は25%にしかない計算である。これを多めに見積もって100リーブルであったとしても33%にしかない。一方、紙代は、一連あたり20スーつまり1リーブルであり、総量で何連使うのかによるが、100連使うだけでも100リーブル、経費の約33%という計算になり、簡単に印刷費用を超えてしまう。上質紙であれば当然さらに高価になる。フェーブル／マルタン(1985 上巻, 237ff.)は、いくつかのデータに基づいて紙代の比重の高さを強調している。印刷を依頼する料金と比較したと

22 1リーブル=20スーとされ、さらに1スー=12ドニエと計算される。

23 これについてはリーブル・トゥルノワかリーブル・パリジかが明記されていない。

きの紙代は、15世紀のイタリアの二例では同額程度か3割、4割増し、16世紀のフランスの例では、印刷代の半額程度か、紙の輸送費が加算されて3割増し、17世紀フランスの例では印刷費と紙代はほぼ同額だったが、学校教科書の例では印刷費が紙の価格の2倍近くに達したのもあった。因みに、17世紀の北ドイツの都市リューベックで10台の印刷機を構えた大規模な印刷出版業者の記録では、1666年から1675年にかけての10年間の紙代金の支出に占める割合の平均は27%であった²⁴。

印刷工房の契約額が書物の印刷事業全体に占める比率が低いのはなぜなのか。簡単に言ってしまうと、グーテンベルクあるいはフストとシェファアの活動した時代は独占事業であったものが、しばらくはヨーロッパ各地の大学・教会、裕福な市民から招かれて印刷所が開設普及される段階を経ると、瞬く間にヨーロッパ中に広まったお陰で印刷工房の競争時代に入ったことが原因と言えよう。そうした状況で、印刷工房自体は一部の例外を除き資本力の無い零細経営だった。1570年のジュネーブの場合、印刷工房は全部で20箇所あったが、印刷機の台数で見ると、印刷機4台の工房が3箇所、2台の工房が5箇所、1台だけの工房が12箇所というように、小規模経営の印刷工房が多数派であった（フェーブル／マルタン 1985 上巻, 272.）。「一台の印刷機には、一組四～五人の労働者が必要で」、「植字工が一～二名、刷り工が二名、それに使い走りをしたり細々した仕事をこなす徒弟1名」で構成され、これに校正者が一名加わるが、校正者は「職人ではなく、教養ある人士、あるいは著述家で」あった（フェーブル／マルタン 1985 上巻, 271.）。時代的な背景もあるが、16世紀を例にとれば労働条件は大変に厳しい。一日の労働時間は、16世紀末のジュネーブで12時間（5：00～19：00、昼休み2時間）、仕事のノルマという点では、1563年のフランクフルトでの植字工への要求が一日に組み版1つから3つ分とされ、刷り工への要求では、「16世紀末リヨンで一日3350枚、パリでは2650枚」、「フランクフルトでは……仕事の難易によって3050枚～3375枚」が要求された。これは、「かりに2500枚として一日14時間働くと、1時間当たり178枚印刷する計算となり、……20秒ごとに一枚」という印刷スピードになる²⁵。しかも、印刷労働者は比較的低賃金だという資料が残っており、1572年の記録によれば「パリの植字工は月に18リーブル・トゥルノフ（日給12スー）」²⁶しか受け取れなかった。1654年のパリのケースで、ラテン語などの知識が求められた植字工（月に24～27リーブル）よりも刷り工の賃金（月に33リーブル）が高いことについて、フェーブル／マルタン（1985 上巻, 273）は「奇妙な現象」としている。

24 Schellmann (2013, 92) 参照。

25 フェーブル／マルタン（1985 上巻, 272ff.）参照。マイnitzのグーテンベルク博物館には15世紀当時の印刷機を模したデモンストレーション用印刷機がある。実際の印刷を体験すると、印刷紙をのせる非常に重い台を活字位置に合わせて前後に出し入れする作業、レバーを一気に回転させて活字面を文字通りプレスする作業は相当な重労働であることが体感できる。

26 フェーブル／マルタン（1985 上巻, 273f.）参照。

これに関連して、Stöber (2005, 31.) は「書物の廉価化の傾向」を論じる中で「紙の価格が16世紀末までに1450年時の価格の七分の一から九分の一に低下した」と指摘している。つまり、紙の代金も下落したものの、印刷工房の従業員の労賃も圧縮されることで、紙代の占める比率にそれほどの変化が起こらなかったという推測が成り立つ。

4.2. 印刷出版事業の資本主義的再編成

このように、書籍の企画・出版自体に財政的なリスクがあり、小規模経営の多かった印刷工房がそれに対処する方法などあったのだろうか。ときには、出版に際して出資者が存在することもあった。教会関係の出版物であれば、司教、教会参事会員が融資したり、行政上の出版物であれば、国、都市が出資することもあったが、それは印刷普及期のまれなケースと言えよう。それでも印刷工房自身を取り得る方策がいくつかあった。第一には、印刷業者は商品でもある書籍の価格面の魅力を強め、市場での競争力を高めるといふ資本主義の原理そのままに、「質の悪い紙に頼ろうとし」、「本の原価を低くおさえよう」と (フェーブル／マルタン 1985 上巻, 240f.) したり²⁷、高賃金とさえ言えない職人の代わりに若い徒弟や親方自身の家族を労働力として投入することもあった (同上, 272.)。第二に、売れ行きがある程度確実な教会関係の印刷物を請け負うことを狙うこともあった (同上 241.)。第三に、「同時にいくつかの出版を企画する」といふ、「非常に大きな資本を投下」 (同上) する策を講じることもあった。こうした事情から資本との結びつきという方途が生じてくる。書籍商でもある資本家との提携や甚だしくは大資本自身が大規模な印刷工房を運営するなどのケースがそれに該当し、資本家の役割は出資して「出版のリスクを負う」だけでなく、「上梓された製品の流通に責任を持つ」たり、「出版すべきテキストを選ぶ」ことにまで及んだ。

フェーブル／マルタン (1985 上巻, 242ff. および 258ff.) は、印刷工房と資本家との結びつきを、ハーゲナウ (現在のフランス、アルザス地方の都市) の印刷工グランとニュルンベルクのコーベルガーの例などから解説している。グランの場合、「1489年に開業」し、「1496年まで……文法書と説教集を出しただけ」の状況から、「1497年以降……アウクスブルクの商人ハンス・リンマンと提携」した結果、「全部で約290点以上」を刊行することになるが、「240点はリンマンの……ためのもの」だったのである。アントン・コーベルガーは、「1473年から1513年の間に少なくとも236点の書物」、とくに最初のドイツ語訳の聖書を世に送り出した出版人であり、「神学とスコラ哲学の書物の出版を専門」に、「神学部と教会法学部の学生に必要なものをみな出版した」。彼は「大学御用達の書籍商でもあったが、「何よりもまずその資本に利潤を生ませることを考える実業家であり、とりわけ商人」だと評されている。コーベルガーは1509年の段階で「24台の印刷機、……100人の植字工、刷り工、校正係、彫版師、製本師が忙しく働」く印刷所

27 Schellmann (2013, 77f.) では紙代として仕入れ値の3.7倍を帳簿に記載している。

を所有していた。因みにここで画家のアルブレヒト・デューラーは「書物の装丁や挿絵の相談にのった」とされている。コーベルガーは、「彼の出版物をみな売り捌く」ために「文字通りの販売網を」もち、「フランクフルト、ライプツィヒ、ウィーン、ケルン、バーゼル、ストラスブルなどドイツ語圏の大きな都市ばかりでなく、……ブダペスト、ワルシャワ、ヴェネツィア、フィレンツェ、アントヴェルペン、ブリュッヘ(ブリュージュ)、ライデン、そしてもちろんパリにもみな、直販店や代理人を置」き、中小の出版業者にとって重要な「仲介者」という存在でもあった²⁸。こうした出版業者は小規模な印刷所へのいわば外注も選択肢として活用したことで、小規模印刷所の依存的な体質を強めたことは明らかであろう。

さらに、本節冒頭に触れた営業努力以外に、小規模経営の印刷所の親方が方策として取ったことがある。何せ彼らは何としても印刷機を回転させ続けねばならなかったから、そのために、「通知状、貼紙、あらゆる種類の案内書といった「町の注文仕事」や、初等読本とか近くの学院の教材の」印刷仕事を確保することに務めていた。グーテンベルク工房(グーテンベルク自身のみならずフストとシェファー以後も含め)でさえ、聖書という大事業以外に、教会関係の印刷物を印刷していたことも思い起こしてもらいたい。これらの例として挙げられているのはいずれも、不定期な発注である。もし定期的な印刷物の依頼があれば、彼らにとって大きな営業拡大と何よりも定期的収入による生活安定の方策と捉えるのではなかろうか。

5 16、17世紀の印刷事業の環境と新聞の出現との関連

印刷業者は16世紀末の段階では、経営上の理由から安定した継続的な仕事を求める状況に置かれていた。そうしたなか、資本の無い印刷業者の僅かな投資も素早く回収できそうな商品で、質をあまり問われない安価な紙を使って、しかも定期的とは言い難いが固定客と固定収入を確保できる印刷刊行物の可能性として *Neue Zeitung* (不定期な印刷物であった) に目を付けたのではという推測が成り立つ。しかも宗教改革やトルコ軍の侵攻を経て、世は情報を求めている、すなわち新しい情報への強い需要が存在していたことは間違いない。すなわち一定の需要が *Neue Zeitung* を定期的にしたものには見込めると判断しても何の不思議もなかったと言えるだろう。

5.1. ヨハン・カロルの請願書

ドイツでは19世紀から大学の研究対象として新聞が取り上げられることがあった。そもそも

28 フェーブル/マルタン(同上)は、アントヴェルペンのプランタンを大資本出版人の典型例として挙げているが、それは都市の大学、教会、裕福な市民層との結びつきに留まらず、何よりも統治者たるスペイン国王の庇護と助成を獲得した点に着目したためである。

ヨーロッパでの新聞の発生といえば、現存する最古の新聞がたまたまドイツ語圏のものということから、これまでもストラスブールで刊行された週刊新聞 „Relation Aller Fürnemmen und gedenckwürdigen Historien“ (以下 Relation と省略) とヴォルフエンビュッテルで刊行されたとする „Aviso Relation oder Zeitung“ (以下 Aviso と省略) の二紙についてはいわば集中的に調査研究がなされてきた。Weber (1992, 257.) は、どちらが最古の新聞であるのかに関連して、「Aviso が高い確率で1609年に事実世に問われたのに対して、……ストラスブールの Relation は幾分それ以前に発行されていたのではないかという点が今日まで不明であった」と述べている。こうした点について、ストラスブール市参事会宛の Johann Carolus による新聞独占発行に関する請願書と参事会からの布告 (1605年12月21日付け²⁹)、その後のストラスブールおよびアルザス地域での公文書類の研究がいくつかの解明をもたらしている。

Weber (1992, 260.) は、Johann Carolus という人物について判明していることを、「ミュールバッハ³⁰の牧師の息子で製本師を生業にし、1599年に24才でストラスブールのアンナ・フレリッヒと婚姻、同市市民となり、1601年市内の Thomasplatz に家を購入し、また死亡した Tobias Jobin の印刷所を1604年9月までに買い取り、その在庫書籍の販売(権)³¹も併せて取得した」と、まとめている。こうした情報の根拠は、婚姻届や印刷所取得の許可手続きに関する文書記録と考えられる。とくに印刷所取得に関する布告は1604年に出されているが、1605年の布告の文面からは、市公認の書籍印刷者、書籍販売人、出版者としての Johann Carolus が、すでに相当期間新聞執筆者 (この場合手書き新聞のこと) として、また同時に印刷業者として活動していることが読み取れる。Weber (1992, 261.) も注目しているのは、一人の人物におけるこの両者の結びつきである。彼は毎週定期的に入手できたニュースを「加筆することなく……時間をかけて、ゆっくりと書き写し」てきたのである (Weber 1992, 258.)。「今日の眼から画期的と見られる、手書きの新聞から印刷された新聞への移行は、その歴史的な瞬間には技術次元の小さなステップだった」(Weber 同上) とも言える。

本論との関連で重視すべきは、請願書の文面に見られる「しかし書き写すのはゆっくりとしか進まず、多くの時間がそれで費やさざるをえなかった」とか、「天福に与った Tobias Jobin の印刷所を高額で買い取り、少なからぬ費用をかけて我が家に設置した」という言い方からは、新聞発行を含め合理化という発想で、経済的な利益を追求する事業者の発想である。同時にまた、「当地の他の書籍印刷業者も、新聞を編集し印刷することに参入するかもしれず、……それが私には特に不利益であり、損害をもたらすでしょう」とか、「(新聞の) 創始者としてとくに費用、努力、苦勞を注いできた」ことを繰り返している。さらに競合相手として「書籍印刷業

29 Weber (1992, 265.) はストラスブール市参事会が週に複数回参集したことなどから、最古の新聞が1605年の10月頃に誕生したのではと推測している。

30 Mühlbach という地名はアルザス地方だけでも2箇所あり、Weber は特定していない。

31 市参事会からの布告の原文には「nachdrucken 増刷する」の表現が見られる。

者、書籍行商人、書籍販売人」を挙げ、10年間の独占発行権とそれへの違反には罰金を課すよう求めている。Johann Carolus が買収した印刷工房の規模などについては先行研究で触れられていないが、少なくとも大規模であったとは考えにくい。中規模以下の印刷工房の運営に取り組み始め、何とか利益を上げようとし、少しでも安定した経営を確立したいと考えたであろう点は想像に難くない。

Johann Carolus の独占的新聞発行権の認可請願は参事会にすげなく拒絶されるものの、グーテンベルク以降の印刷業者に共通する経済的な安定の希求がここにも想定できる。この経済的背景と新聞発行との連関の可能性についてはすでに先行研究がある。それが Schneider (2010) である。Schneider は、まず17世紀当時の書籍・印刷業界に大まかに三つの業種を確認している。印刷業者と出版人を兼ねた者(Druckerverleger)、製本業者で書籍販売も行う者(Buchbinder)、出版人兼取り次ぎ販売業者(Verlegersortimenter)の三者を書籍販売という商行為の次元での競争相手と位置づけている。さらに言えば、とくに小都市や郡部での店舗販売や行商も行う書籍販売・行商人(Buchhändler/Buchführer)がこれに加わる。Schneider は、書籍取引システムが与えた業界への影響にまず注目する。フェーブル/マルタン(1985)でも指摘されている国境を越えた書籍の物々交換という商慣習と、フランクフルトやライプツィヒを中心にした見本市での書籍取引である。中小規模が多数であった印刷業者兼出版人は、大量の取引物品としての書籍を持参、展示したり、倉庫を確保したりする資本的余裕など無かった(この点では製本業者も同様)。逆に出版人兼取り次ぎ販売業者はもともと資本を備えた者が多い。さらに、フェーブル/マルタン(1985)でも指摘された点であるが、大資本の出版人兼取り次ぎ販売業者は、印刷工房に書籍印刷を発注するという依存関係があったと考えられる。こうしたなかで、三種類の書籍・印刷物販売に関わる業種には役割分担が明瞭になってくる。

見本市の重要性を考えれば、「見本市が印刷業者の(書籍の)制作日程を決定し、見本市に間に合わないと販売機会を喪失する」という事情が生まれ、「見本市前はフル稼働だが、その後は生産能力に余剰」(Schneider 2010, 30f.)が発生する。確かに印刷業者でも規模に関しては、「大都市や大学都市での独占的店舗」(Schneider 2010, 32f.)として活動する大規模な所もあったようだが、こうした場合ですら、「大学の公認独占印刷業者」としての「経済的な確実さ」がある反面で、大学側からの「定価による利益の限定」や「競争を促す」ことでの低価格化も求められたことが指摘されている(Schneider 2010, 33.)。

表5からも分かる通り、印刷業者兼出版人は、発注を受けた書籍以外には地域的な限定を受けた印刷物の制作をせざるをえず、「継続的に生存を確保するためには書籍取引システムでのうまみのある『隙間市場』を探す必要があった」(Schneider 2010, 30.)。なぜなら「印刷業者にとっては、継続的な収入源をもつことが生き残る上で必要」ためであり、それは「継続性のある販売市場を切り開くような商品を創出する」ことにつながり、「すべての点を満たすのが新聞だった」(Schneider 2010, 34.)ということになる。

表5 16/17世紀の書籍販売で競合する三者の特徴 (Schneider 2010 により作成)

	出版人兼取り次ぎ販売業者 (Verlegersortimenter)	製本業者兼書籍販売業者 (Buchbinder)	出版人兼印刷業者 (Druckerverleger)
取り扱い商品の例示と特徴	ラテン語の神学、法学、医学等の学問書、ドイツ語の散文作品 政治的パンフレット、雑誌 (国際的、国内的に需要のある製品)	市民層の需要に応える商品である暦、教養書、祈祷書、パンフなど (地域的に需要が限定された製品)	パンフレット、ビラ、聖歌集、初等学校用教科書、教養書、宗教的小冊子、暦、その他の臨時的印刷物
取引形態	見本市、その他の流通での地域、国を越えた取引	最終消費者への直接現金取引 * 製本形態での販売	書籍販売業者との取引、最終消費者への直接現金取引
立地	大都市に本拠、主要都市に販売網、Leipzig などの見本市開催都市には倉庫	中小都市に兼用店舗	印刷工房との兼用店舗
資本力の多寡	資本潤沢	資本僅か	資本僅か
同業者組合		両者で同業者組合 (Zunft) を構成する	

もちろん、前段階として、「出版印刷業者にとってはマスメディア的性格の印刷物が魅力的だった」ことがある。彼らは「大衆に受け入れられ易いイラストを添えたビラ、パンフや臨時新聞」の木版本や不定期の *Neue Zeitungen* の経験から知っていたからである。また、ビラ、パンフが「1000部から1500部程度では比較的製作も販売も容易」であり、「一枚もののビラは一台の印刷機で印刷可能」で「生産能力の活用について、時間の計算ができるという利点」があった。また、「最終消費者に直接売れるという利点」は、「印刷業者がこうした商品に投資した現金が比較的早期に戻りえた」ことを意味する (Schneider 2010, 35.)。

ビラやパンフレット同様、新聞についても、「一つの組版、一つの印刷工程で4ページ³²、8ページものを印刷可能」であり、「17世紀の印刷工房の平均的能力が300枚の印刷」であることから、新聞は一日で (一回の印刷工程で) 印刷可能という技術的な利点は共通である。さらに重要な点は、「制作費用はニュースの入手費用、紙代、他の資材代金、労賃」からなるが、「新聞販売の売り上げをはるかに下回る」ことである。また商品としての新聞の利点として、「内容だけでなく、それ自体を新しい事件を広める魅力的なメディアとして売り込めた」こと、「潜在的な読者に、事件の場所と日付を提示することで継続性」をアピールできたことが指摘されている (Schneider 2010, 35ff.)。Schneider (同上) は、「印刷業者にとって、新聞発行の経済的な動機は内容的な動機よりもはるかに重要視すべき」と主張している。

5.2. 新聞成立の要因の多面性

新聞成立の前提の一つである紙の生産・供給を含む活版印刷術、グーテンベルク以降とくに

32 ストラスブールで発行された *Relation* 紙も週刊で4ページ構成である。

17世紀の印刷業者の状況などについて少々詳しく紹介し、印刷工房の経済的性格と新聞成立との結びつきの可能性を論じてきた。1609年には存在したことが確認されている週刊新聞であるが、それへの需要について考える必要が当然でてくる。神聖ローマ帝国版図の総人口が16世紀初めで1100～1200万人、医療・栄養状態の改善などにより17世紀初めには1600～1800万人とも推計されている³³。その内のどれほどの人々が新聞を読んだのか、はたまた読み聞かせしてもらっていたと考えられるのか。また、新聞製作に直接関わる情報・ニュースを仕入れるためには、前提としてニュースが伝わる経路としての交通・通信網の問題も考慮する必要がある。いわゆる郵便制度が問題となるが、これについて Behringer (2012, 39) は逆に「なぜ15世紀に即時的なニュースの印刷が始まらなかったのか」を問うべきだと指摘している。すなわち「空間と時間を新たに組織することが、近世の一連のメディア革命にとって必要な前提を形成したのだ」という主張である。これらの点の検討は次の機会に譲りたい。

参考文献

- Behringer, W. (2010) Das Netzwerk der Netzwerke. Raumportionierung und Medienrevolution in der Frühen Neuzeit. In: Arndt, J./Körber, E.-B. (Hrsg.) *Das Mediensystem im Alten Reich der Frühen Neuzeit (1600-1750)*. Vandenhoeck&Ruprecht, Göttingen, S.39-57.
- 江口 豊(2013)「ドイツ語圏活字メディアの歴史について—新聞を中心に—」(研究ノート) *国際広報メディア・観光学ジャーナル* 17, 3-12.
- (2014)「ドイツ語圏における新聞の前身形態について」(研究ノート) *メディア・コミュニケーション研究* 66, 59-71.
- フェーブル/マルタン (関根他訳) (1985) 『書物の出現』 筑摩書房、東京。
- (Febvre, L./Martin, H.-J. (1971) *L'apparition du livre*, Paris.)
- Füssel, S. (2004)² *Gutenberg und seine Wirkung*. Insel Verlag, Frankfurt am Main.
- Giesecke, M. (2006)⁴ *Der Buchdruck in der frühen Neuzeit. Eine historische Fallstudie über die Durchsetzung neuer Informations- und Kommunikationstechnologien*. Suhrkamp, Frankfurt am Main.
- Hoffmann, L. (1993) Die Gutenbergbibel. Eine Kosten- und Gewinnschätzung des ersten Bibeldrucks auf der Grundlage zeitgenössischer Quellen. In: *Archiv für Geschichte des deutschen Buchwesens*, Bd 39, 255-319.
- Irsigler, F. (2012a) Die Kleinen Leute. Soziale Randgruppen im 15. Jahrhundert.
In: Herbers, K./Schuller, F. (Hrsg.) *Europa im 15. Jahrhundert*. S.105-121.
- (2012b) An der Wiege der Massenmedien. Papier, Buchdruck, Holzschnitt und Kupferstich.
In: Herbers, K./Schuller, F. (Hrsg.) *Europa im 15. Jahrhundert*. S.122-135.
- Jaeger, F. (2008) *Enzyklopädie der Neuzeit*. Bad. 8. Metzler, Stuttgart/Weimar.
- Lindemann, M. (1969) *Deutsche Presse bis 1815*. Colloquium Verlag, Berlin.
- Ruppel, A. (1939) *Johannes Gutenberg. Sein Leben und sein Werk*. Verlag Gebrüder Mann, Berlin.
- Schellmann, W. (2013) Das Kontobuch der Lüneburger Offizin der Sterne.
In: *Archiv für Geschichte des deutschen Buchwesens*, Bd 39, 47-103.
- Schneider, U. (2010) Grundlagen des Mediensystems: Drucker, Verleger, Buchhändler in ihren ökonomischen Beziehungen 1600-1750. In: Arndt, J./Körber, E.-B. (Hrsg.) *Das Mediensystem im Alten Reich der Frühen Neuzeit (1600-1750)* Vandenhoeck&Ruprecht, Göttingen, S.27-37.

33 Irsigler 2012a, S.105.参照。

Stöber, R. (2005) *Deutsche Pressegeschichte*. UVK, Konstanz.

Weber, J.(1992) »Unterthenige Supplication Johann Caroli / Buchdruckers« Der Beginn gedruckter politischer Wochenzeitungen im Jahre 1605. In: *Archiv für Geschichte des deutschen Buchwesens*, Bd.38, S.257-265.

Welke, M. (2008): Johann Carolus und der Beginn der periodischen Tagespresse. Versuch, einen Irrweg zu korrigieren. In: Welke, M./Wilke, J. (Hrsg.) *400 Jahre Zeitung. Die Entwicklung der Tagespresse im internationalen Kontext*. Edition lumiér, Bremen, S.9-116.

(2014年2月4日受付、2014年5月27日受理)

《SUMMARY》

〈research in progress〉

On the historical development of printing and its influence on the creation
of the newspaper in the modern period

Yutaka EGUCHI

The first weekly newspapers in the world were published in 1609 in Europe, in the German speaking area. The question as to why the newspapers were founded in the territory of the former Holy Roman Empire has many aspects to consider. It has still not been proved whether the weekly newspaper was mono originated, i.e. actually published only in Strassbourg, or if the appearance of the new printing media occurred simultaneously in several cities without interactions between them.

Searching for the causes of how the newspaper emerged is very difficult due to the lack of primary sources. However, there are some circumstantial elements acknowledged as factors in the origin of this public communication tool. One research strand focuses on the “manufacturer” of the newspaper: the printer. Based on Fevre/Matin (1971) and Schneider (2010), this paper argues that the printing industry and its historical development in the 16th and 17th century promoted the emergence of the newspaper. In particular, the increasing competition in the printing industry forced printers to seek a new stable income opportunity in newspapers which provided a regular readership and economic resource.

The problem discussed here is only one of the many aspects about the communication process “the newspaper”. It is further necessary to investigate such factors as the post (as both an information and transport system), the readership as the consumers (the literacy and economic capacity of the population), and the censorship of journalism and so on.